核戦争に反対する医師の会

反核医師の会ニュース

第38号
2008年3月31日

IPPNW第18回大会に58カ国 600名が参加

インド・デリーで開催される

3月9日から3日間、IPPNW（核戦争防止国際医師会議）第18回世界大会はインド・デリー市内のVP HOUSEで開かれた。反核医師の会から、医学生3人を含む21人の代表団（通訳、事務局含む）が参加した。大会には各国から延べ600人（58カ国）が参加した。

世界大会は「核兵器廃絶にむけた国際キャンペーン挑戦と好機」など5つのテーマでの全体会をはじめパネルディスカッションや分科会が行われた。

初日の開会セッションにはインドのHamid Ansari（ハミッド・アンサリ）副大統領が演説し、「インドは暴力のない世界、核兵器の災害のない世界を熱望している」と述べ、「会議のテーマ『平和、健康そして発展』は時を得たものであり会議のすべてが成功することを期待する」と結んだ。また、世界大会を準備したIDPD（平和と発展のためのインド医師の会）のM Nara Singh副会長がIPPNWの支援のもとで平和・健康・発展をめざす医師の運動の発展について報告した。また、大会事務局長のArun Mitra（アルン・ミトゥラ）・IDPD事務局長が「ヘルシンキからデリーまで」と題して報告した。

2日目の昼の指定報告（Presentation）では、インド国内のJadugoda（ジャデゥゴラ）ウラン鉱山周辺の住民の健康状態（健康被害）について、詳しい報告が行われた。

パワーポイントで映し出される現地の状況に関心が集まった。

最終日にはAnbumani Ramadoss（アンブマニ・ラマドス）インド労働保健大臣が出席し、演説を行い、核兵器国の核兵器使用の危険だけでなく、テロリストやそれ以外の非国家主体（non-state-actors）の手に落ちる危険についても言及した。

最後に、会議は第19回世界大会を2010年8月25日から30日まで、スイス・バーゼル市で行うことを確認した。

（3面に参加者の感想、「デリー宣言」）

「平和・健康そして発展」をテーマに3月9日から3日間の日程で開催された。

なくしまっし　核兵器！

11月に第19回反核医師・医学者のつどいを石川県で開催

第19回「核戦争に反対し、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」の第1回実行委員会が、北陸3県の各代表と事務局の出席のもと3月11日に発足した。

実行委員会では、主務地となる石川の反核医師の会世話人会で協議してきた内容と経過を報告。北陸3県が協力して実行委員会の体制を整えることを確認し、企画内容の検討を行った。

今年のつどいは11月22日、23日の両日、兼六園や金沢城を臨む金沢の中心地で開催する。

メインテーマは、「北陸から発信するICAN なくしまっし　核兵器」とする予定。

第18回のつどいの記念講演でIPPNWオーストラリア支部長のティルマン・ラフ氏が提案した「核は廃絶できる　I can, You can, We all can」を受けて、核兵器廃絶条約の実現をめざすIPPNWの国際キャンペーンを日本にも広め、定着させていこうという思いを込めた。今回のつどいを、核兵器廃絶をめざした草の根運動（ICAN運動）に学び、各地に広げる機会としたい。

また、原爆症認定制度が4月から新基準で運用されることが決まっているが、つどいの開催時期には新基準の問題点が洗い出されているはず。新基準の評価や原爆症認定集団訴訟の取り組みなどについても企画に盛り込む予定。この他つどいを盛り上げるため、市民参加型の企画の準備も進めている。

ご承知のとおり金沢は、金沢城と兼六園を中心に武家屋敷跡や茶屋街などが建ち並ぶ加賀百万石の城下町。一方で、旧日本陸軍の第9師団が置かれ、731部隊とも縁が深く負の遺産が残る。さらに石川県には志賀原発、福井県には「原発銀座」と呼ばれる程の原発と関連施設の林立地域がある。つどい開催に際してはこれらが多くの示唆を与えてくれるだろう。今年も多数の参加者を期待している。

石川県兼六園・ことじ灯籠（上）
昨年の第18回大会には全国から335人が参加した（右）

2008年度会費納入のおねがい

会員各位

日頃のご奮闘に心から敬意を表します。

さて、「反核医師の会」では今年も第19回つどい開催のほか、20周年記念事業の準備を進めています。つきましては会の財政基盤の安定のためにも、2008年度の会費納入を同封の払込取扱票にてお支払いくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、すでに納入済みの場合等、行き違いがあった場合は、ご容赦下さい。

◇団体会員（各県の「反核医師の会」などの団体）	一口	10,000円
◇個人会員（医師・歯科医師、医学者）		10,000円
◇協力団体会員（全国団体）	一口	50,000円
◇賛助会員（個人会員以外の個人、医学生、団体など）	一口	1,000円

まだ何も決まってはいない！

―原爆症認定集団訴訟の現状について―

東京反核医師の会　向山　新

2003年4月17日に始まった原爆症認定集団訴訟が、いよいよ大詰めを迎えている。一部では、解決したかのように報道されているが、今まさにたたかいの正念場である。

全国各地での勝訴を力に、安倍前首相の認定基準見直し発言を引き出したのは皆さんご存知の通りである。しかし、厚生労働省もおいそれと被爆者の要求を丸呑みするわけにはいかない。専門家による「原爆症認定の在り方に関する検討会」を招集し、小手先の見なおしですませようともくろんだ。一方自民党、公明党は「与党原爆被爆者対策に関するプロジェクトチーム（与党ＰＴ）」で厚労省とは別に検討を始めた。被爆者は、2007年9月に「原爆症認定制度の見直しに当たっての要求」を厚労相に提出し、「在り方検討会」や与党ＰＴ、各党の国会議員などに様々な働きかけを行った。

案の定12月17日に出された「在り方検討会」の報告は、いかにも被爆者の要求に応えたかのように見えながら、ＤＳ02と原因確率を基礎とする現行の「審査の方針」の枠組みを維持し、司法判断を真っ向から否定し、「専門家」の名の下に被爆者切り捨ての行政を追認したものであり、被爆者にとっては絶対に容認できない中身であった。直ちに被団協は抗議声明を発表した。

12月19日に出た与党ＰＴのとりまとめは「原因確率論をあらため、新たな認定基準をたてている点、特段反対すべき事由がなければ合理的に推定して原爆症と認定するとの自動的な認定方法を導入している点、医療分科会の改革に踏み込んでいる点」は被爆者の要求を真摯に受け止めたものであった。ただし、「被爆者の間に線引きがされている、自動認定の対象疾病から肝臓疾患などが除かれている」などの問題が残されていると被団協は指摘した。

1月10日に原告団は「原告の決意と訴え」をまとめ、11日に被団協と原告団代表が舛添厚労相に要請を行い、その結果として1月17日与党ＰＴとりまとめをベースとした「新しい審査のイメージ」が発表された。

この「イメージ」には、「これまでの原因確率による審査を全面的にあらため、迅速かつ積極的に認定を行うこととする」とある。とうとう、原因確率を使わないというところまで追い詰めたのである。がん・白血病・副甲状腺機能亢進症、放射線白内障、放射線起因性が認められる心筋梗塞について、原因確率10％以上は審査会を省略して認定する。10％以下の場合と、放射線白内障、心筋梗塞については「3・5km以内の直爆、100時間以内に約2km以内に入市、100時間以後に1週間以上爆心地付近に滞在した人」は積極的に認定するとしている。それ以外の疾患、被爆状況の場合については、個別審査の上総合的判断を行うとしている。

厚労省は、これで幕引きをしたかったようであるが、被爆者にはそのまま受け入れることはできない内容である。「これまでの原因確率による審査を全面的にあらため、迅速かつ積極的に認定を行うこととする」とする点は評価できる。しかし、被爆者救済の理念が明示されておらず、(1)被爆者の間に線引きがされている、(2)肝臓疾患などの疾患が除外されるなど対象疾患が限定されている、(3)訴訟の解決について言及されていない、(4)医療分科会の改革が示されていないなどの問題が残されている。

原告団、被団協、弁護団は引き続き厚労省との協議を行ったが、厚労省は3月17日医療分科会でイメージに基づく新しい審査の方針を決定した。約300人の原告のうち100人は認定されない可能性もある。

本当の解決に向けて、私たちも力を合わせて支援をしてゆこう。

（全国・常任世話人、2008年3月27日記）

被爆二世の援護を拡大しよう

広島共立病院　青木 克明

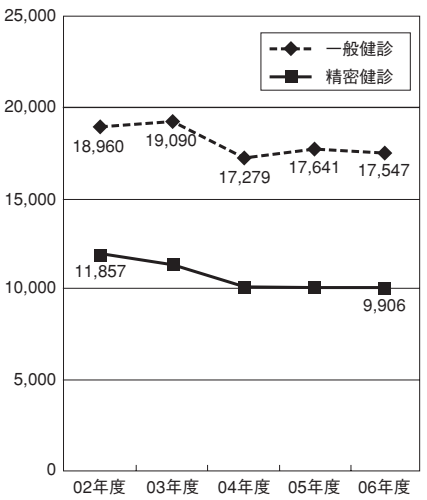
国の責任で被爆二世癌健診を

被爆二世は30万人とも50万人とも言われていますが、国の援護は被爆者一般健診（貧血、肝機能、検尿など）と同じ内容の被爆二世健診が実施されているだけです。自治体が上乗せしている援護として、無料癌健診（東京都）、医療費自己負担分補助（東京、神奈川等）、被爆二世手帳交付（東京、神奈川、長崎市、山口県等7自治体）があります。東京、神奈川の援護は70年代の革新自治体で開始され、東京では年間700万円が使われています。

被爆二世健診は2006年度には全国で1万7547件実施されましたが、被爆者1000人あたりでは6・6件に過ぎません。全国集計ではこの5年間で8％減少（図1）、しかし、東京都では46％も増加しています（図2）。東京都の受診者は914人、癌健診は2690件で、1人あたり2・8件になります。無料癌健診が健診受診者を増加させていると考えられます。

神奈川県の2006年度の被爆者は5488人ですが、「こども受診証」所持者は4869人に増加しており、数年後には被爆者を上回りそうです。医療費補助は1552件、1059万円が支給されています。放影研の調査では被爆二世の生活習慣病の発症率、癌およびその他の疾患での死亡率に現時点では有意差はないとしていますが、今後どうなるかは分かりません。被爆二世が最も不安なのは遺伝による発癌です。国の責任で無料の被爆二世癌健診を実施することが望まれます。

（図1）被爆二世健診全国合計実施数の推移

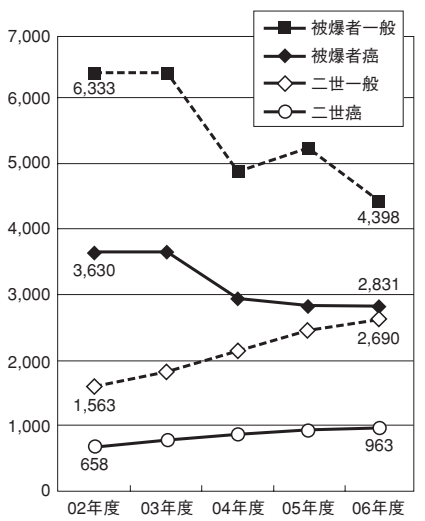


被爆二世健診　受診者の3分の2が女性　平均年齢49歳

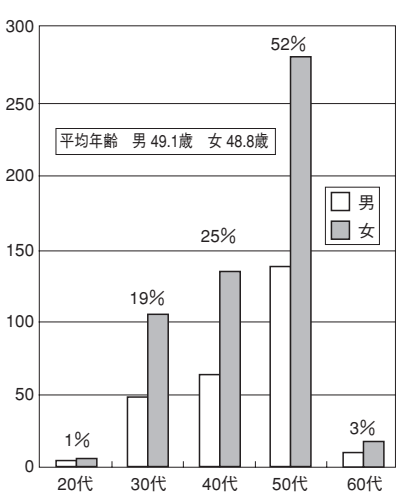
広島共立病院で2006年度に実施した被爆二世健診は802件で広島市全体の12％にあたります。精密検査としてγGTP、総コレステロール、中性脂肪、血糖、尿酸、35歳以上は心電図を実施しています。受診者の67％が女性で平均年齢は49歳、年代別では50代が52％、40代が25％、30代が19％、60代が3％、20代が1％でした（図3）。自治体癌健診を同時に受診した方は肺癌28％、大腸癌17％、乳癌14％、胃癌4％でした。検査結果は高血圧が男性24％、女性12％、肝障害が男性32％、女性13％、高脂血症が男性47％、女性38％、糖尿病が男性22％、女性10％であり、人間ドック学会の全国集計とほぼ一致しています。遺伝的影響についての相談を希望される方は4％でした。

受診者へのアンケート調査では、健診内容に大変満足は8％、ほぼ満足が61％。ぜひ毎年受けたいは92％でした。毎年受診している方は54％、今回が最初は8％でした。無料癌健診については99％が賛成。医療費自己負担分補助は98％が賛成。被爆二世手帳の交付は95％が賛成でした。

（図2）東京都の被爆者健診の推移



（図3）2006年度　広島共立病院被爆二世健診性別、年代別受診数



被爆者対策予算を削減しないで援護の拡大を

国の被爆者対策予算は2001年の1658億円をピークに毎年減少しており、今年度は1536億で前年より30億円減です。被爆二世健診数も2001年をピークに減少しており、小泉内閣の誕生の年と奇しくも一致しています。来年度予算は今年度と全く同額です。安倍元首相が原爆症認定制度改革を約束したので被爆者の死亡で減少する41億円を医療特別手当にまわして原爆症認定者を1800人増やすことにしています。被爆者対策予算を今後も削減させないで、原爆症認定に続いて在外被爆者、被爆二世への援護も拡大させなくてはなりません。

（全国・常任世話人）

デリー宣言　2008年3月9日

核戦争防止国際医師会議（IPPNW）第18回世界会議のためにデリーに参集したわれわれにとって、核兵器のない世界に手が届く希望は、これまでになく大きい。政治的情勢としては、核兵器保有国の中ですら、核廃絶が望ましく、現実的だと、あからさまに議論されるようになった。そして、人類が21世紀を生き抜こうとするなら、核撤廃が絶対に必要だとさえ、言われるようになった。核兵器保有特権にしがみつく諸国が、核廃絶について交渉することには、激しく抵抗し続けることを、われわれは知っている。しかし、その抵抗は、ますます時代遅れで、不合理で、偽善的となる。

ヘルシンキの第17回世界会議の後に、IPPNWは、核兵器廃絶国際キャンペーン―ICAN―を開始した。このキャンペーンの焦点は核兵器条約である。それは、核廃絶を達成し、核廃絶を国際法により担保する方途である。われわれは、核保有国に対し、特に、そのリーダーシップが（核廃絶に）不可欠な米国に対し、これ以上遅れることなく、条約作成の話し合いを開始するよう要求する。次期米国大統領候補者は、目指す政権の最優先の公約として、現時点で、地球規模の核廃絶を掲げるべきである。

インドには、核兵器のない世界を達成するために、極めて重要な役割がある。インドが1998年に核実験をし、核保有国宣言をしたことは遺憾極まりない。その行為は、ただちにパキスタンにより模倣された。南アジア全域を荒廃させ、何千万人もの人々を殺し、何10年間もその準大陸の大部分を居住不能にする核戦争の危機は、現在も、常時存在する。そのうえ、最近インドとパキスタンが使用可能となった核兵器による地域核戦争は、地球の気候に深甚な影響を与え、地球規模の農業生産の崩壊と飢餓を招来することが、新しい研究により指摘されている。

核の時代の全経過を通じて、インドは、核兵器の先制不使用、不使用、核警戒態勢解除などの政策で、先駆的役割をはたした；インドは、核分裂物質生産禁止を求め、核兵器の全面的除去のための期限付き交渉開催要求を、長い間、支持してきた。元首相ラジブ・ガンジーによる、核兵器のない世界に向けた1988行動計画は、今日の核兵器条約作成の要求と共鳴するものである。インドは、国際司法裁判所法廷において、核兵器の保有、生産、またはその使用は、いかなる事情にあっても、国際法的に非合法であると、言明した。これは、大胆で、論理的な姿勢である。その後の核兵器保有は、これと相容れない。最近の国連総会において、インドは、核軍縮決議に多数派として賛成票を投じた。この決議は、実施されれば、われわれを核兵器のない世界に近づけるものである。われわれは、インドに対し、核軍縮に向けた世界的リーダーシップを、今日より初めて、目標が達成されるまで、発揮するよう要求する。

核兵器のない世界に到達するのに、米国の国際政治におけるリーダーシップが不可欠だとするなら、それにおとらず、インドの道義的、政治的リーダーシップもまた不可欠である。世界の経済大国の一つとしてたち現れたインドでは、その非暴力の尊い伝統が、何10年間もの武力紛争によって損なわれている。平和で、公正で、持続可能な社会秩序を作り出そうとするインドの戦いは、世界に共通する戦いである。地球温暖化、貧困、資源枯渇、人口増加、経済発展、人権、食品の安全、全ての人の健康確保など、人類最大の課題のすべては、インドをも脅かしており、その解決に向けた全面的取り組みがインドに求められる。

なかでも最重要の課題は、戦禍を終わらせることである。現在も核が存在するこの世界に働きかけ、考えられる最悪の形態の戦争、核戦争を、防止するのは、医師として、そして社会的責任のある人間として、われわれの最も緊急で最優先の目標である。ガンジーの祖国において、われわれはその目標に向けて専心することを誓う。

（事務局訳）

IPPNW 第18回大会

参加者の報告

21名が参加した反核医師の会代表団

海外の学生に驚き

今回初めてIPPNW世界大会に参加させていただきました。行きの飛行機でのアクシデントもあり、開催地であるインドに降り立ったときには乗客から拍手が沸き起こる状況。インドを訪れることも含め、初めての経験がたくさんあった旅でした。

さて2日目からの参加になった大会では、まず分科会を作って発表している学生たちに驚かされました。僕は「Challenge of Drugs for The Poor」という、ドイツ学生が作った分科会に参加しました。つたない英語力でどこまで理解できたかはかなりきわどいところですが、「製薬会社が特許を独占して高い値段で薬を供給している。それによって薬を必要としている発展途上国の人々が苦しんでいるのはおかしい。製薬会社はもっと安く薬を供給すべきだし、できるはずだ。」という想いは感じることができました。海外の学生のプレゼン能力、ディスカッションスキルには驚かされます。自分も海外の人々と意見交流ができるよう、もっと英語を上達させたいと素直に思いました。

3日目のシンポジウムでは、各国の代表者が核兵器廃絶に対する考えやそれに向けての具体的な活動を発表し、意見が交わされました。核兵器問題に留まらず、インドの貧困状況を切実と語ったり、キューバの医療支援の話なども発表されました。

今回の参加で思ったことは、核兵器というのは人体に修復不能なダメージを与える実際問題であると同時に、平和に対する脅威のシンボルであるということです。大会の内容は環境、格差、貧困、差別など人の健康に害を与える様々な問題を取り上げています。医学者や医学生が集まるこのような世界規模の大会は他に知りません。

2年後のスイスでの世界大会もぜひ参加してみたいと思いました。

今回は皆様のおかげで貴重な経験をさせていただきました。ご協力に感謝を申し上げます。ぜひ今後の活動にもこの経験を生かしていきたいです。

（金沢医科大学三年　本間理）

反核医師の会ブース

原爆パネルの展示や「すみやかな核兵器廃絶のために」署名活動にとりくみ111名分を集約した。また、9条世界会議英語版リーフ200枚、九条の会シール200枚、LOVE&PEACEバッジ200ケ、折鶴80羽、戦争と医学展英語版パネルとパンフなどの宣伝、普及をおこなった。

核、環境、経済、教育　決して無関心ではいられない

全体を通して痛感したのが、核問題を考えるにあたり、核のことだけ考えてもだめだということ。今回の大会では環境問題、経済問題、教育問題ととても広い分野が取り上げられ、そのどれをとっても決して無関心ではいられないと感じました。

個人的に心をひかれたのはJadugoda村のウラン鉱山による健康被害の問題です。

人間の誕生という素晴らしい瞬間を喜びでなく悲しみで迎えられるような悲しい現実が私の知らない所で今現在も起こっているということはショックでした。私は赤ちゃんが生まれた瞬間のお母さんの安心しきった、言葉では表現できないような喜びの表情がとても好きです。それが不安や悲しみに変わるようなことはあってはならないと思います。

研修の2年間を振り返ると、社会問題について真剣に取り組む機会はほとんどなかったように思います。最初は自分の技術と経験を積むのに精一杯で世界の出来事や国内の問題でさえ真剣に考えることがありませんでした。今回、世界に若い医師も同じ考えでいることが分かりました。デイスカッションしたことを教訓にこれからは忙しい時間の合間に新聞やインターネットで情報収集をしていきたいと思います。

最後に、インド人について心に残った話。大会期間中に偶然インド人の結婚式と誕生会に出くわしました。私たちは物珍しそうにじっと見入ったりカメラを向けたりしていたところ、愛想良く話しかけてくれ、「一緒に参加してくれ」「もっと写真を取ってくれ」と言ってくれたり、誕生日のケーキを分けてくれたりしました。喜びはみんなで祝うのがいいという考えなのか、インド人のフレンドリーさに驚きました。このような関係が国と国の間でもすんなり成立したらとてもいい社会になるのだろうなあと強く感じたインドでのエピソードです。

今回IPPNW世界大会に参加するにあたり、募金に協力してくださった職員の皆様に心から感謝の気持ちを申し上げます。声をかけてくださった反核医師の会の先生方、貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。

与えられた機会を無駄にしないように、これからも多くの人に伝えていきたいです。

（北海道勤医協中央病院2年目研修医　小泉明希）

各地の反核医師の会から

愛媛反核医師の会 2007年の活動

曽根 康夫

「愛媛反核医師の会」は2002年の結成以来①年2～3回の世話人会②「全国反核医師の集い」への代表派遣とその報告、の2つを継続してきました。2007年も2回の世話人会開催と京都の集いへ1名を派遣しました。

6月伊予市での「原水禁四国大会」では原爆症認定大阪訴訟証人の郷地先生の講演があり、「原爆症―罪なき人の灯を継いで」（郷地秀夫、かもがわ出版）、「真実を聞いてくれ。俺は劣化ウランを見てしまった」（湾岸戦争帰還元米兵デニス・カイン、日本評論社）の販売を行いました。

7、8月には映画「ナガサキ1945アンゼラスの鐘」上映会が松山、新居浜で行われました。ともに地域の市民運動として実行委員会が結成され、両会場とも親子連れなど約700名が参加しました。反核医師の会員も実行委員会の中で役割を果しました。新居浜上映会の利益8万円は、イラクへの医療支援にあてました。

イラク医療支援カンパは9条の会主催の「高遠菜穂子講演会」で20万円、民医連整形外科懇話会で4万円など多くが集り、JIM-NET（日本イラク医療支援ネットワーク）を通じてイラクの子供達へ送りました。地域での医療講演会の際に、劣化ウランの放射線被曝で苦しむイラクの子供達の映像を流すと、多くの方が「知らなかった」と驚かれ募金に応じてくれました。もっと多くの人に真実を伝えねばと感じました。

デニス・カイン氏（左）と筆者

11月23日きくちゆみ講演会「戦争の作り方平和の創り方。米9・11テロに隠された真実」（松山80名、新居浜180名）では前座で、反核医師の集い京都の報告を行い、デニス・カイン著書「真実を聞いてくれ」も販売しました。

2008年5月デニスが来日します。愛媛県内の3市（松山、新居浜、今治）をはじめ、関西・中四国中心に約10箇所での講演会を企画しています。近代戦湾岸戦争の従軍体験と劣化ウラン被爆者としての米国の反核平和運動を語ってもらいます。青年や若い医師の手で実行委員会を作り、運動の新しい担い手が生まれることを期待しています。

IPPNW ―岩手からの報告―

中島 達雄

1945年8月、広島・長崎への原爆投下を体験した者は人間として再びこの様な地獄があってはならないと骨身にしみ、心に刻みつけられている。

そしてそれを作ったアインシュタインはじめ多くの科学者（日本では湯川・朝永等）はその廃絶を強く訴えてきた。

しかし各国の政治家はそれを嘲笑う様に核兵器の恐ろしさを弄んでいる様に見える。

この国でも既に戦後63年を経て大多数の人々は戦争の現実を知らず、溢れんばかりの物の豊富な生活にひたり、楽しみを求め、戦争・核兵器など他人の絵空事の様に感じている節さえある。

更に一部の政治家は、この国の安全を守る為には核装備が必要であると蠢いている。

1980年IPPNWが結成され、日本にも入った。創始者であるBarnard Lown教授が医学講演に来日され、日医ニュースでIPPNWの必要性を訴え各県に理解された。

岩手県では1989年、全国30番目の支部が発会した。当時非常に盛り上がり、翌年には会員数167名になり講演会、被爆者の証言、ジョン・オダネル被爆写真展、県内他団体との協力による映画会、地域集会、オーストラリア・ソウル大会出席、岩手医大生を伴ってのアジア地域会議（長崎）参加等、活発に活動してきた。それが事務局長の死去、事務局員の病気休職が重なり、2000～2005年休会のやむなきに陥った。

2006年に至り事務局に適材を得て活動再開にこぎつけたが、会員の老齢化が進み、次世代の無関心さが目立つ様になり苦慮しておるところである。

しかし人類が生き残る為に世界中の膨大な軍事費を核兵器廃絶・地球浄化に向ける時が来る迄、心の灯を絶やさず、皆で連帯し、努力を続けるべきだと思いつめている。

全国・常任世話人で、長年反核運動にご尽力されてきた福岡・佐々木秀隆先生が今年1月7日急逝されました。75歳。

反核医師の会会員で福岡の角銅しおり先生より、佐々木先生を偲び、追悼文が寄せられましたのでご紹介します。

佐々木秀隆先生を偲んで

福岡・千鳥橋病院　角銅 しおり

佐々木先生との最初の出会いは、1996年（？）にさかのぼります。まだ私が反核医師の会での活動をはじめた頃、全国反核医師の会が東京で開催され、その会場で出会いました。まだ、佐々木先生のことを全く知らず、ある分科会で先生が発言され、「鋭い指摘だな、目も鋭い人だな」と感じていました。その会では、フィリピンから医学生が参加し、東京からは、青年医師や医学生の参加が多く、佐々木先生はそれにつられました。「こっちでも（反核医師の会）やらんかね、ぜひ、会議に出てよ」と誘われ、福岡反核医師の会の会議に参加するようになりました。福岡反核医師の会でもいつも先生は、後継者を作っていく事の大切さやこの運動を広げていくにはどうすればいいか、誰もが気軽に反核・平和について関心をもってもらうにはどうすればいいか、語りかけていました。

北京でのIPPNWアジア国際会議に一緒に参加したことはとても印象深い思いも発言され、今後の発展のためには後継者対策を、と発言もなさいました。それから数年のちに私が福岡民医連に移籍をし、ある日、食堂でお昼を食べていると「おお、来たね」と佐々木先生が声をかけてこい出です。多くは語らない先生でしたが、対外的な発言では、真正面から鋭く発言され、私たちの立場や主張を述べる大きな存在でした。私はそれに甘え、日常診療に追われ、会の活動にもなかなか出られなくなっていた時にも、病院で会うと、手をあげて挨拶をしてきてくれました。いつまでも一緒に活動できると信じていたのですが、残念でなりません。総会の時に歌う、『We shall overcome』。佐々木先生の声が聞こえてきます。

力不足ですが、佐々木先生の反核への想いを少しでも共有できた友人として、その意志を引き継いでいきたいと思います。

書評

平和へのアクション101+2 戦争やテロのない世界の実現に向けて

（原書「Enough Blood Shed」メリーウィン・アシュフォード著）

松井 和夫（監訳者）

松井 和夫氏

近年、紛争解決のノーハウが蓄積され、確立されてきた。それに直接携わる者は、高度の知識や訓練、技術、経験を要し、命がけでもある。もちろん、誰もができるものではない。しかし、私たちには一人一人が、日常生活の中で、自分の身の丈に合った彼らの活動の支え方がある。今や、平和運動は、単に戦争に反対しやめろと要求するだけには留まっていない。戦争の原因がハッキリし、何をすればよいかがハッキリし、紛争を解決する運動、予防する運動へと質が転換してきたのだ。

本書では、以上のことを裏付けるような直接的、間接的な世界中の具体的成功例が何百と集められている。本書は個々の運動を紹介するのが目的ではないが、断片的な事実ではあるが個々の事例から、他者を、世の中を変えることができるのだと実感できる。

ところで、命をかけてまでも「平和」や「正義」を求めたり、身内を殺した相手を「許し、和解」したりできる、その原動力は何なのだろうか。原著者は、それを道徳やスピリチュアルなものに見出そうとする。それは宗教を越えた物でもある。日本では道徳が常に支配者に都合よく解釈されてきた。しかし、言葉はどうであれ、素直に我々があるべき姿、「他者を思いやる」などの源泉としての道徳、美徳、モラル、倫理などが、平和を説くとき最も大切な動機であろう。

スピリチャルのイメージは本来的なものと異なるものがメディアで垂れ流されているが、欧米の主なNGOは活動の源をスピリチュアルなものに求めている。

翻訳作業は大勢のボランティアに支えられてであったが、予想以上に困難な仕事であった。本書を繰り返し読み、一言一言の意味を吟味せざるを得なかったが、そのことにより何十倍もの感動を与えられた。著者の言わんとすることが翻訳本を通して、伝わることを切に願っている。

アシュフォード氏

4月中旬発行

かもがわ出版　2008年
定価 2,730円（本体2,600円）